

グローバル化に対応した私立中高一貫校 におけるリーダー教育

－次世代リーダーを育てる私学教育－

森 弘 達 (昭和薬科大学附属中学・高等学校)

1. はじめに

東日本大震災からの復興、福島第一原発事故への対応、エネルギー問題、財政危機、グローバル化の急速な進展など、日本は未曾有の難局に直面していると言われている。このような危機の時代こそリーダーの力に大きな期待が寄せられる。しかし、現実には、リーダー不在が叫ばれて久しい。また、従来のリーダーシップでは危機の時代を乗り越えることは難しい。山積する国内問題やグローバル化に対応できるリーダーを育てる教育が求められている。私はこれまでに指導者として、G8九州・沖縄サミット・高校生サミット、内閣府アジア青年の家、こども国連環境会議などの国際的・全国的な活動に取り組んできた。本研究では、これらの経験を踏まえ、私が新たに参加・協力・連携しているグローバル化に対応したリーダー教育プログラムを研究し、私学教育におけるリーダー教育のあり方について提案する。本研究成果報告では、私の勤務校である昭和薬科大学附属高等学校・中学校で実施しているグローバル化に対応したリーダー教育プログラムの紹介、外部機関の提供するグローバル化に対応したリーダー教育プログラムの紹介などを行い、グローバル化に対応した私立中高一貫校におけるリーダー教育の方向性を提起する。特に、外部機関の提供するグローバル化に対応したリーダー教育プログラムを重点的に扱う。

2. 昭和薬科大学附属高等学校・中学校のグローバル化に対応したリーダー教育・研修

(1) 学校法人沖縄科学技術大学院大学学園沖縄科学技術大学院大学 (OIST) 研修。2012 年度から高校 2 学年対象の日帰り研修として、沖縄科学技術大学院大学 (OIST) 研修を行っている。沖縄科学技術大学院大学 (OIST) は、5 年一貫制の博士課程を置く大学院大学である。教員と学生の半数以上を外国人とし、教育と研究は全て英語で行われている。OIST の教育研究活動は学際的で先端的なものである。神経科学、分子・細胞・発生生物学、数学・計算科学、環境・生態学、物理学・化学の 5 分野に大別される研究を行っている。研修プログラムの内容は、OIST の概要説明、OIST 研究員による研究活動の紹介、研究施設見学ツアー、副学長による講演となっている。研究活動の紹介は、マリンゲノミックスの研究、神経発達ユニット、神経計算ユニット、生物多様性・複雑性研究ユニットに関するものであった。キャンパスツアーは、ロボット室、電子顕微鏡室、スーパーコンピュータールームを見学し、スカイウォークからキャンパス全体を眺望するという内容である。高度な研修だが、世界最先端研究を高校生として体験することに意義がある。

(2) 独立行政法人国際協力機構 (JICA) 沖縄国際センター研修及び国際交流事業。高校 3 学年対象の日帰り研修として国際協力機構 (JICA) 研修を行っている。研修プログラムの内容は、ワークショップ (世界がもし 100 人の村だったら)、国際協力機構 (JICA) 沖縄国際センターの施設見学、国際協力機構 (JICA) の事業紹介、青年海外協力隊の体験談である。趣旨は、異文化理解及び発展途上国の現状や国際協力の必要性について理解を深め、国際的な視野を培うことである。なお、この研修とは別に、独立行政法人国際

協力機構（JICA）沖縄国際センターと公益社団法人浦添青年会議所の結 CONSCIOUS 委員会による国際交流事業が行われた。趣旨は、未来を担う沖縄県浦添市の生徒たちが沖縄国際センターの沿革や役割等について学び、研修員や浦添青年会議所会員と交流することによって異文化に対する興味や理解を深め、参加した生徒たちがグローバルな視点や感性、リーダーシップを養うことである。内容は、沖縄国際センターの事業説明、ワークショップ（貿易ゲーム）、昼食をとりながらの研修員との交流、音楽を通じた研修員との交流、JICA パートナーシップに参加した浦添青年会議所会員の体験談、生徒たちの意見発表である。

3. 沖縄県におけるグローバル化に対応したリーダー教育プログラム

(1) Ryukyu frogs。Ryukyu frogs とは、グローバルに活躍できる沖縄の次世代リーダーを育成するプログラムである。Ryukyu frogs は 2007 年にはじまった民間企業主導の学生向け人材育成プログラムである。沖縄県内に居住する高校生以上の生徒・学生及び沖縄県出身の大学生が対象である。半年間の全てのプログラムを民間企業の協賛によって提供する。frog とは、蛙のことであり、「井の中の蛙、大海を知らず」という諺をモチーフとしている。沖縄の高校生や大学生が沖縄という枠にとらわれた「井の中の蛙」から脱却し、世界という大海で通用する未来のグローバル・リーダーとして磨きをかけ、次世代リーダーとしての志とともに成長することを目指している。発足当時は沖縄の次世代 IT リーダーを育成したいという想いから設立された IT frogs であった。5 期目から沖縄全体の人材育成プラットフォームとして Ryukyu frogs に発展した。同時に高校生限定で、シリコンバレー研修に同行できるプログラム TOMODACHI - frogs jr. もアメリカ TOMODACHI イニシアティブとの提携で実現した。

選抜後は事前研修として 1 か月半、派遣までに必要なスキルを身につける研修を実施する。世界中の起業家が集まるアメリカ・シリコンバレーの研修は、約 10 日間であり、Google や Evernote、スタンフォード大学など世界をリードする企業や教育機関を訪問し、世界最先端技術や新しいビジネスモデルに触れることで自らのビジョンやビジネスプランをブラッシュアップしていく。スタートアップのファウンダーやエンジニア、ベンチャー・キャピタルとの交流も行う。帰国後は、報告会に向けてプレゼンテーション研修を行う。

(2) グローバル・リーダー育成海外短期研修事業・国際性に富む人材育成留学事業。沖縄県内の公立・私立高等学校及び国立工業高等専門学校に通う 1、2 年生すべての生徒（アメリカ高等教育体験研修は 3 年生も可）がエントリー可能な留学支援制度である。まずは 1～3 週間程度の短期留学を経験できるグローバル・リーダー育成海外短期研修事業がある。こちらはアメリカ高等教育体験研修、海外サイエンス体験短期研修、中国教育交流研修、沖縄県高校生芸術文化国際交流プログラムの 4 つに分けられ、最先端の文化や技術を現地を見て、研修に参加することができる。また、約 1 年間に渡って海外での暮らしが経験できる国際性に富む人材育成留学事業では、ホームステイや現地の高校の授業を通して、語学力はもちろん滞在国の真の姿に触れ、国際感覚を磨くことができる。

(3) 世界若者ウチナーンチュ大会。世界若者ウチナーンチュ連合会（WYUA）は、第 5 回世界のウチナーンチュ大会（2011 年 10 月開催）に向け、次世代継承を目的に結成された若者・学生事務局である。この事務局が国際会議を自主提案・開催し、その結果、世界若者ウチナーンチュ連合会（WYUA）が発足した。沖縄本部は 51 名（若手社会人、県内大学生・高校生）で構成され、支部は、7 か国 9 支部（2013 年 5 月現在）で構成されている。第 6 回世界のウチナーンチュ大会に向けて、毎年世界各国持ち回りで開催する世界若者ウチナーンチュ大会を提言し、2012 年に第 1 回世界若者ウチナーンチュ大会をブラジルで開催した。2013 年に第 2 回世界若者ウチナーンチュ大会をアメリカ・ロサンゼルスで開催した。活動として、アイデンティティーの継承・文化継承、・しまくとぅば復興に関する事業、ウチナーネットワークの強化に関する事

業、世界のウチナンチュ大会に関する事業、世界若者ウチナンチュ大会の企画・運営、海外子弟留学生、海外研修生との連携およびサポートを行っている。参加する若者たちが自ら企画し、自己負担と協賛企業の寄附のみによって運営されている。沖縄県からの予算措置がないという課題を抱えているが、グローバル化に対応したリーダー教育のプログラムとして高く評価でき、発展が期待される。

4. 全国的なグローバル化に対応したリーダー教育プログラム

(1) 全日本高校模擬国連大会。全日本高校模擬国連大会は、全国から高校生が集まり、国際連合会議のシミュレーションを行う大会である。出場者は2名1チームで国連加盟国の大使役を務め、1つのテーマについて、2日間にわたり互いに議論・交渉を行う。議論の大半は国際公用語である英語で進行する。大会を主催するグローバル・クラスルーム日本委員会は大会の目的として、以下の2点を掲げている。①国際連合及び国際関係に関する研究と国際問題の正確な理解又その解決策の探求を促進すること。②豊かな国際感覚と社会性を有し、未来の国際社会に指導的立場から大いに貢献できる人材を育成し、輩出すること。一次選考では、英語課題・日本語課題による選考が行われ、国際問題に対する知識と考察力が求められる。103校164チームの応募のうち、一次選考を通過し、今回の全国大会への出場したのは51校65チームであった。課題に取り組み、国際的視野を培うことは、グローバル化に対応したリーダー教育として価値がある。各チームは、大使として自国の利益や、政治的・国際的状況を把握するため、担当国のリサーチを行ったうえで大会に出場する。大会は、他国との交渉・折衝を通し、多くの国が賛同する問題解決策をまとめることを目的として進行する。大会の最後には、最優秀チーム、優秀チームが選ばれ、ニューヨークの国連本部で開催される高校模擬国連国際大会へ派遣される。

(2) G1ユース。G1サミットは、混迷する世界にあって、次世代を担うリーダー層が集い、学び、議論し、日本再生のヴィジョンを描くための場である。政治・経済・ビジネス・科学技術・文化など、様々な分野の第一線で活躍する同世代の仲間が、互いに学び、立場を超えて議論し、未知の領域であった知恵を自らの糧としながら、良き仲間を得て、リーダーとして自身も周囲も成長していくことを趣旨としている。

2013年2月に「福島・東北の復興と日本の再創造」をテーマに第5回G1サミットが福島県で開催され、その際に、高校生対象の第1回G1ユースが開催された。G1ユースのミッションは、今を知り、未来を考える力を身につけることである。具体的には、混迷する時代における各界のリーダーたちが集うG1サミットにおいて、次世代の主人公である若者と、リーダーたちが未来への展望について直接意見交換をする場を設けること、及び現役のリーダーたちが、何を考え、どんな失敗を乗り越え、何を悩み、何を議論しているのかを次世代の主人公に知ってもらう場を設けることである。第6回G1ユースは2014年3月に沖縄県石垣市で開催される。第6回G1ユースの応募資格は、沖縄県内の高校1・2年生である。選考は、エッセイと高校教諭による推薦書によって行われる。

5. グローバル化に対応したリーダー教育プログラムの提案

(1) 次世代リーダーズ・キャンプ。次世代リーダーズ・キャンプは、私がボランティアとして運営する次世代リーダーズ・キャンプ実行委員会が主催し、NPO沖縄学力向上の会が共催するグローバル化に対応したリーダー教育プログラムである。目的は、沖縄県の次世代を担うリーダーを育成すること、及び参加した学生・生徒たちが将来のヴィジョンを提言することである。研修は、中学生・高校生・大学生を対象に1泊2日で行った。研修プログラムの内容は、①オリエンテーション、リーダーシップについて学ぶ(昭和薬科大学附属高等学校・中学校教諭 森弘達)、②リーダーになる人に知っておいてほしいこと(松下政経塾第20期生 喜友名智子)、③国際社会に通用するリーダーシップ(BNPパリバ証券株式会社資本市場部

長 名城文夫)、④道州制と沖縄の将来(琉球大学教育学部教授 島袋純)、⑤沖縄から世界を目指して(株式会社レキサス代表取締役社長 比屋根隆)、⑥沖縄県政の課題と展望(沖縄県議会議員、松下政経塾第23期生 上里直司)、⑦政策ディベート(森弘達)、⑧立志論文執筆・発表、⑨次世代リーダーズ・キャンプ 沖縄宣言である。世界と沖縄をテーマとした講義が多く、グローバルとローカルの両方の視点を大切にしたい。グローバルなリーダー教育プログラムである。急速なグローバル化に伴う地域社会の崩壊が叫ばれる中で、グローバル化に対応したリーダー教育プログラムのモデルとして提案したい。

(2) 国際バカロレアディプロマプログラム (IBDP)。国際バカロレアディプロマプログラム (IBDP) は、非営利団体である国際バカロレア機構 (本部スイス) が学校を認定し、プログラムを提供している。アメリカのハーバード大学、イエール大学、コロンビア大学、イギリスのオックスフォード大学、ケンブリッジ大学などで入学可否判定の審査資料に使われている。IBDP は、第1言語、第2言語、個人と社会 (歴史・経済・経営)、実験科学 (生物・化学・物理)、芸術 (美術) の6つの探究教科群と、知識の論理、創造性・活動・奉仕、課題論文の3つのコアで構成されている。IBDP の核心にあるものが10項目からなるIB学習者像であり、これらの追求を通して、リーダー性、高い学習能力、社会性、健全さを育てていく。IBDP は教育の世界標準の1つであり、グローバル化に対応したリーダー教育プログラムのモデルとして提案したい。だが、生徒の英語力、教員の養成、費用、国内の大学入試における対応など、課題が多い。

6. おわりに

最後に、本研究を行うに当たり、多大な協力を頂いた一般財団法人日本私学教育研究所、独立行政法人国際協力機構 (JICA) 沖縄国際センター、沖縄科学技術大学院大学 (OIST)、学校法人立命館、立命館宇治中学校・高等学校、Ryukyu frogs 事務局・株式会社レキサス、01Start up 合同会社、世界若者ウチナーンチュ連合会 (WYUA)、G1 ユース事務局、株式会社ベネッセ・コーポレーション、株式会社ハンズ・コム、株式会社エヌ・キューブ・エンターテインメント、教育再生実行会議委員 佐々木喜一氏、下村博文文部科学大臣後援会長・民間教育連盟会長 森本一氏、また、本研究のために設置した沖縄グローバル・リーダー教育研究会のメンバー、勤務校である昭和薬科大学附属高等学校・中学校に対して感謝申しあげる。

参考文献・資料・主要引用

文部科学省教育再生実行会議『第三次提言』『第四次提言』(文部科学省)、一般社団法人沖縄県留学振興会ホームページ <http://www.opsac.jp/>、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター・グローバル・クラスルーム日本委員会高校生のための模擬国連活動ホームページ <http://jmun.org/gc/gc/>、世界若者ウチナーンチュ連合会 (WYUA) ホームページ <http://yuao.org/>、Ryukyu frogs ホームページ <http://ryukyu-frogs.com/>、G1 サミットホームページ <http://glsummit.com/glsummit/about.html>、立命館宇治中学校・高等学校『学校案内・ご訪問者用資料』2013.10、日本入試センター『Y-SAPIX journal』2014 vol.10 (日本入試センター)、ハンズ進学応援室『沖縄の高校生のためのシンガク図鑑』2014 早春号 (ハンズ・コム)